

統語意味論に基づく中国語形容詞述語文の分析

基于“统语意味论”理论的汉语形容词谓语句的分析

郭 楊
Kaku You

“统语意味论”理论是由上山あゆみ在2015年以其出版的同名著作提出的一个新型语言学理论。它既延续了生成语法对语言可以从各个词汇所带的特征出发自由创造出不同新句子的主张，又修正了生成语法只侧重句法分析而忽略了词义与句义、句法与句意如何同时解释的问题。本文利用“统语意味论”为理论背景，从理论语言学的角度假设了汉语形容词谓语句“张三高。”和“张三 很高。”中两个“高”的词语特性不同，从而成功地说明了两个句子句义不同的原因。

キーワード：

統語意味論、生成文法、中国語、形容詞

1. はじめに

統語意味論は、上山氏が2015年に出版した「統語意味論」の著書およびその後の関連研究をもって世に出されている。この文法理論は、生成文法をバックグラウンドとして作られた。しかし、統語分析に偏っていると言える生成文法より、統語意味論は、構造と語彙の関係をより透明に示すことに工夫を施し、完全な文の形でない場合（fragment）の意味表示が書け、文の意味と談話の意味の関係を明示的にしたなどのことより、生成文法の新展開をみせている。

生成文法は、アメリカ構造主義の「経験論」と違い、言語の習得は直接語の配列パターンを習得することによるものではなく、語彙表現の特性及び統語的規則の習得によるものであると考える。世界の言語は多種多様に見えるのも、それらの材料となる語彙表現の特性がさまざまだからである。人間は、単に聞き覚えた言語をそのまま繰り返しているわけではなく、習得した「部品」をさまざまな組み合わせ方により、オリジナルの文法を作りあげることができる。生成文法は、このような「部品を組み合わせ、どんどん創造、生成しうる」という点こそ、言語の本質であると考え。筆者は、生成文法に感銘をうけ、研究の背景にするのは、以上のような生成文法の考え方に賛同しているからである。

上山(2015)の「統語意味論」はどのような言語学著書であるか、紹介するために、まず簡単にその書評の一部を(1)に引用する。

- (1) 本書の目的は、著者によると、「生成文法の研究方法をその基盤から洗い直し、これまでの知見をなるべく活かしつつ、今後の研究をその上に積み重ねていける形に整頓しなおすこと」(p.6)となる。「統語意味論」という新しい名を付けたのも、統語論偏重の一部の文法理論に対抗する意図があるのだろう。

[郡司 2017: 152]

本研究で行った中国語の形容詞“高”と“很高”の分析は、基本的にはチョムスキーの生成文法の考え方に立っているが、具体的な研究手法や表記方法は、上山(2015)の統語意味論に基づいて行った。本稿は、2節と3節では筆者の博士論文である郭(2019)の第2章(pp.4~12)の一部を直接引用し、それぞれ生成文法と統語意味論の考え方を紹介したうえ、4節では中国語の形容詞“高”と“很高”の語彙特性における相違を挙げ、さらに5節と6節では中国語形容詞述語文の“张三 高。”と“张三 很高。”にある語彙のLexiconを仮定し、Numeration、樹形図、意味表示を統語意味論に基づいて書いてみた。

2. 生成文法

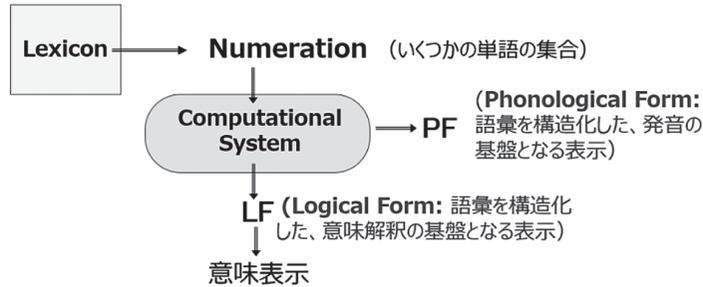
本研究は基本的にはチョムスキーの生成文法の考え方に立っているが、具体的な研究手法や表記方法は、上山(2015)の統語意味論に基づいて行った。このセクションでは、まず、生成文法について、そして次節では上山(2015)について、簡単に紹介する。

2.1. 生成文法

20世紀の前半までは、言語学を科学として確立させ、構造言語学の創始者であるフェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure)が言語学の主役であったとすれば、20世紀の後半からは、1957年にSyntactic Structuresを出版した、生成文法の創始者であるノーム・チョムスキー(Noam Chomsky)が言語学の主役であると言っていいだろう。統語論や意味論だけでなく、1980年以降の認知言語学の発達も、生成文法から影響を受けている。

生成文法では、人間の頭の中には、Computational Systemという計算装置があり、それがNumerationと呼ばれる語彙項目の集合を入力として、文という構築物を出力として出すと考えている。

(2) 生成文法の文法像



[郭 2019: 4(5)]

(2)にある LF 表示とは、語と語がどのように構築されて、文という 1つの構築物になっているのかを示すものである。PF 表示とは、音の側面から文の構造を示すものである。われわれが普段考えている「文」というのは、LF と PF の二つ側面をもっている。

また、生成文法は、一気に今の形になったのではなく、いくつかの重要な段階を経てきた。ここではその経緯、あるいは生成文法の現在の枠組みを紹介するのは割愛するが、『21 世紀の言語学』（2018）に収集されているチョムスキーの講演の日本語訳を使い、生成文法で最も活躍する Merge の概念に対するチョムスキーの最新の考え方を紹介する。その講演では、チョムスキーは以下のように述べている。

(3) すべての計算手続きに何らかの形で組み込まれている、非常に単純な計算的操作があります。それは、すでに形成されている 2つの対象 X と Y を取って、そこから新たな対象 Z を作り出すというものです。この操作のことを、「併合」(Merge) と呼ぶことにしましょう。この併合という操作が、最小計算の原理に従っていると考えることにしましょう。この最小計算の原理は、すべてに優先する原理です。つまり、X も Y も併合の過程において変化を被ることはない、ということになります。順序づけもなされません¹⁾。結果としては、Merge (X, Y) = {X, Y} ということになります。例えば、read と that book を連結して、read that book に対応する「統語体」(syntactic object) を作り出すような場合がそうです。これを「外的併合」(External Merge) と呼びます。

[今井・斎藤 2018: 18]

人間の頭の中にある Computational System の中身の全部は見れないが、(3)の Merge と呼ばれる操作を仮定すれば、なぜ Numeration が同じであっても、意味や語順の異なる文が出力されるかということを説明できる。

本論文は、基本的に、Numeration があれば、その結果として必ず「文」というものが生成

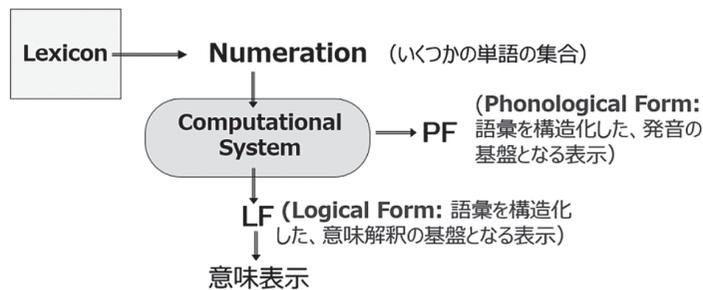
されるという(2)のような生成文法の考え方に立つものである。

3. 上山 (2015) の統語意味論

上山 (2015) の統語意味論は、基本的には(2)のような生成文法の言語観に基づいている。コトバという仕組みを「語彙項目の知識とその組み合わせ方についての知識」としてとらえている。その意味では、統語意味論の目標は生成文法で言う Computation System の働きを明らかにすることと等しい。

(2) 生成文法の文法像 (cf. P3(2) の再提示)

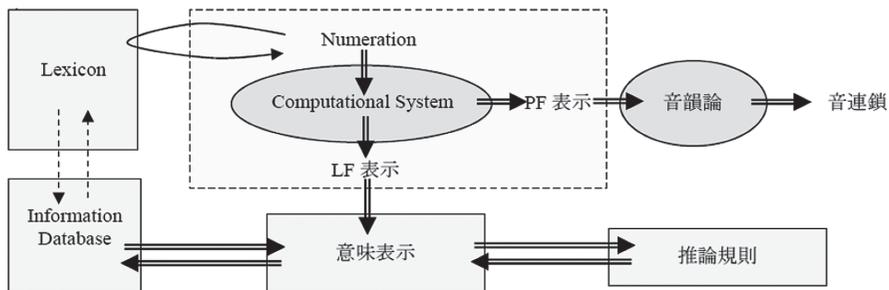
文法モデル



[郭 2019: 4(5)]

そして、統語意味論の研究範囲とその他との位置関係については、上山 (2015) は(4)のように考えている。真ん中の破線で囲まれた部分が(2)に対応している。

(4) 統語意味論と意味理解



[郭 2019: 6(7)]

Lexicon とは、頭の中に蓄えられている語彙項目の知識の総体である。Numeration とは、

Lexicon から選び出された、いくつかの語彙項目の集合であり、それに対して Computational System が構造を与えて、PF 表示と LF 表示という 2 つの構造表示を出力する。PF については、上山（2015）は語順が分かるレベルにしており、それ以上は特にふれていない。

Computational System という仕組みは、Numeration を材料として構築物を作り、それが文の音と意味の解釈の基盤となる。Computational System によって作られた「適格な（well-formed）表示」と「不適格な（ill-formed）表示」についての基本方針を、上山（2015）は次のように決めている。

- (5) a. Numeration に含まれる要素には、解釈不可能素性（uninterpretable feature）が含まれうる。
- b. それぞれの解釈不可能素性は、どのような操作を受け、どのような条件のもとで削除されるかが定められている。
- c. それ以上 Computational System の操作が適用できなくなった段階で、解釈不可能素性を含んでいない表示は適格であり、解釈不可能素性が残っている表示は不適格とする。

[郭 2019: 7(8)]

解釈不可能素性が含まれた語は、その語彙項目単体では自立できず、いわば「欠如」をかかえた状態なのであり、他の語と適切に組み合わせられて初めて、生かされるわけである。言い換えれば、Computational System とは、Numeration に含まれる解釈不可能素性を消していくための操作を行う部門であり、どの語彙項目に対してどのような順番で操作を適用するかは、解釈不可能素性をすべて消すという問題を解決するタスクとしてとらえられることになるというのは上山（2015）が(5)に対して出した解説である。そして、上山（2015）では、解釈不可能素性はすべて囲んで表示することになっている。この表示の仕方は、本稿も使用している。

(4)の図にある Information Database のことを、上山（2015）は人間の頭の中で「世界知識」が蓄えられているところのことだと呼んでいる。それに、Information Database は人間がさまざまな思考や推論などをしたりするためのベースとなるものだとして上山（2015）が考えているので、できるだけ Information Database の情報を形式的に表示することをめざしている。

そこで、上山（2015）が Information Database の形式を次のように考えている。

- (6) Information Database は、(認知的な意味での) object（存在物）の集合であり、object とは、指標と property（特性）の集合の対、property とは、attribute（項目名）と value（値）との対であるとする。（指標は、単なる数字と区別するために、便宜的に大文字の X を先頭に置くことにする。）

のように述べている。

- (10) 従来の生成文法の分析は、構造表示はあっても意味表示を持たなかったため、意味に関わる観察と統語分析との関係を明示的に進めることが困難であった。統語意味論の枠組みを用いて、これまでの知見を取り込むことによって、新しい予測を出し、検証を進めていくことが可能になる。 [上山 2015(b): 3]

4. 中国語の形容詞述語文における“高”と“很高”の相違点

(11a)と(11b)の中国語形容詞述語文は、形態的には(11a)に程度副詞がないのに対し、(11b)に程度副詞“很”があるというところにおいてしか違いがない。しかし、(11a, b)の解釈に示すように、両者の意味は大いに異なっている。

- (11) a. 张三 高。
張三 高い
张三のほうが背が高い。
- b. 张三 很高。
张三 とても 高い
张三は背が高い。

中国語の裸形容詞“高”と程度副詞に修飾された“很高”は、一見程度副詞の有無にしか違いがないが、しかし、両者は統語の面においてはほぼ相補分布になっており、意味の面においても異なっている。(12)は形容詞が主語述語文の述語や結果補語文の補語になっているとき、“高”と“很高”の振る舞いの相違を見せている表である。

(12)

	“高”	“很高”
「主語+形容詞」型の主語形容詞述語文の肯定文と否定文	a. 张三 高。 (張三は(〇〇より)背が高い。)	a. 张三 很高。 (張三は背が高い。)
	b. 张三 不 高。 (張三は背が高くない。)	b.* 张三 不 很高。
“比”による比較構文の肯定文と否定文	a. 张三 比 李四 高。 (張三は李四より背が高い。)	a.* 张三 比 李四 很高。
	b. 张三 不 比 李四 高。 (張三は李四より背が高いことはない。)	b.* 张三 不比 李四 很高。

	“高”	“很高”
三項述語文	张三 高 李四 一头。 張三は李四より頭1つ身長が高い。	*张三 <u>很高</u> 李四 一头。
変化を表す文末助詞 “了”のある主語形容 詞述語文	张三 高 了 (五厘米)。 (張三の身長は (5 cm) 伸びた。)	*张三 <u>很高</u> 了 (五厘米)。
結果補語文	张三 长 高 了 (五厘米)。 (張三の身長は (5 cm) 伸びた。)	*张三 长 <u>很高</u> 了 (五厘米)。
反復疑問文	张三 高 不 高? (張三は身長はどう?)	*张三 <u>很高</u> 不 <u>很高</u> ?
「少し」によって修飾 された場合	a. 张三 高 一点儿。 (張三のほうが少し高い。) b. 张三 有 <u>点儿</u> 高。 (張三は少し高すぎる。)	a.* 张三 <u>很高</u> <u>一点儿</u> 。 b.* 张三 <u>有<u>点儿</u></u> <u>很高</u> 。

実は、形容詞の日中対照において、“高”と“很高”の用法的違いについて論じている研究もある。井上(2002)では、(13)のような記述がある。

- (13) 日本語では、形容詞を単独で用いるだけでも絶対的な基準にもとづく叙述になります。これに対し、中国語では、形容詞を単独で用いると基本的に相対的な基準に叙述になり、それを絶対的な基準にもとづく叙述にかえる(比較や対比のニュアンスを消すためには「たいへん、とても」にあたる絶対基準専用の副詞を加える必要がある、それが「弱く読む『很』である、というわけです。「弱く読む『很』においては、「程度が高い」という意味が弱まり、「絶対的な基準にもとづく叙述」という意味が前面に出ているのです。 [井上 2002: 181]

古川(2004)も、まさに(11a, b)と同様の2つの中国語の文について、(14)のように分析している。

- (14) 二つの例の表層的な違いは程度副詞“很”の有る無しに過ぎない。しかし、(11a)は他者との比較において下された相対的な判断表現であり、(11b)は身長基準値との比較によって下された絶対的判断表現である。

[古川 2004: 48 例文番号は筆者による改変あり]

(13)と(14)の分析にある「絶対的基準・表現」と「相対的基準・表現」はそれぞれどのように定義するかについては記述がないため、本論の分析との比較はできないが、“高”と“很高”の意味が異なっていることには、間違いがないと言えよう。そこで、本論は、統語意味論の考

え方にしたがって、“高”と“很高”の“高”のlexiconをそれぞれ(15a)と(15b)のように仮定する。2つの“高”を区別するため、(11a)の“高”をA類形容詞と呼び、(11b)の“高”をB類形容詞と呼ぶ。

(15) a. (11a)における“高”のlexicon：

$$\langle \text{xn}, [\{A \text{ 類形容詞}\}, \{\langle \text{xn}, \{\langle \text{高}, T \rangle, \langle \text{difference}, ______ \rangle\}\}^2], \\ \langle \star [\text{RH-Merge}, N], \{\langle \text{高さ}, \text{xn} \rangle\}^3], \\ \langle \star [\text{LH-Merge}, N], \{\langle \text{高}, F \rangle\}\}, \text{高}]^4 \rangle$$

b. (11b)の“很高”における“高”のlexicon：

$$\langle \text{xn}, [\{B \text{ 類形容詞}\}, \{\langle \text{xn}, \{\langle \text{高}, \star \rangle\}\}, \\ \langle \star [\text{RH-Merge}, N], \{\langle \text{高さ}, \text{xn} \rangle\}\}, \text{高}] \rangle$$

(15a)と(15b)の2つのLexiconにおいて、もっとも異なっているポイントは、A類形容詞、つまり(11a)における“高”は、その値がTであると同時に、値がFである意味役割を述語の参加者として必要とするのに対し、B類形容詞、つまり(11b)の形容詞“高”は、程度副詞を項として取るところである。そして、A類形容詞が発音されないFである意味役割を取るため、A類形容詞述語文の場合、Zero-Mergeという統語意味論によって考えられた特殊なMergeの適用も必要になる。

(16) Zero-Merge

$$\langle \text{xn}, [\{\text{範疇素性 } 1, \dots\}, \langle \star, \{\dots, \langle \text{意味役割 } 1, \text{値 } 1 \rangle, \dots\}\}, \text{body1}] \rangle \\ \Rightarrow \text{Zero-Merge} \\ \langle \text{xn}, [\{\text{範疇素性 } 1, \dots\}, \{\langle \text{xm}, \{\dots, \langle \text{意味役割 } 1, \text{値 } 1 \rangle, \dots\}\}, \langle \\ \langle \text{xm}, [\{\text{NP}\}, \langle \text{xm}, \{ \} \rangle], \phi \rangle \\ \langle \text{xn}, \phi, \phi, \text{body1} \rangle\} \\ \rangle] \rangle$$

以下、(15)のLexiconについての仮定を用いて、“张三 高。”と“张三 很高。”の派生過程を見せてみる。

5. “张三 高” の派生過程

(17) 张三_{x1} 高_{x2}^o
 张三のほうが背が高い。

(18) (17)の最終的に目指す意味表示

$\langle x1, \{ \langle \text{Name, 张三} \rangle, \langle \text{身長, } x2 \rangle \} \rangle,$
 $\langle x2, \{ \langle \text{高, T} \rangle \} \rangle,$
 $\langle x3, \{ \langle \text{高, F} \rangle \} \rangle$

(19) (17)の樹形図



(20) (17)の Numeration

- a. $\langle x1, [\{N\}, \langle x1, \{ \langle \text{Name, 张三} \rangle \} \rangle, \text{张三}] \rangle$
 b. $\langle x2, [\{A \text{ 類形容詞} \}, \{ \langle x2, \{ \langle \text{高, T} \rangle, \langle \text{difference, } ______ \rangle \} \} \rangle,$
 $\langle \star [\text{RH-Merge, N}], \{ \langle \text{高さ, } x2 \rangle \} \rangle,$
 $\langle \star [\text{LH-Merge, N}], \{ \langle \text{高, F} \rangle \} \rangle \rangle, \text{高}] \rangle$

(21)～(22)は(17)の Merge 過程である。(21)で行う Merge は Zero-Merge であり、“高”の Merge 相手は発音されていない。しかし、この Merge によって、この音形のもたないアイテムが A 類形容詞“高”の「基準」という意味役割を担うことになる。

- (21) a. $\langle x2, [\{A \text{ 類形容詞} \}, \{ \langle x2, \{ \langle \text{高, T} \rangle, \langle \text{difference, } ______ \rangle \} \} \rangle,$
 $\langle \star [\text{RH-Merge, N}], \{ \langle \text{高さ, } x2 \rangle \} \rangle,$
 $\langle \star [\text{LH-Merge, N}], \{ \langle \text{高, F} \rangle \} \rangle \rangle, \text{高}] \rangle$

b. $\langle x3, [\{N\}, \phi, \phi] \rangle,$

Zero-Merge

$\langle x2, [\{A \text{ 類形容詞} \}, \{ \langle x2, \{ \langle \text{高, T} \rangle, \langle \text{difference, } ______ \rangle \} \} \rangle,$
 $\langle \star [\text{RH-Merge, N}], \{ \langle \text{高さ, } x2 \rangle \} \rangle,$
 $\langle x3, \{ \langle \text{高, F} \rangle \} \rangle \rangle, \langle$

$\langle x3, [\phi, \phi, \phi] \rangle,$

⟨x2 [φ, φ, 高]⟩
 >]]

(22) (20a) ⟨x1, [{N}, {⟨x1, {⟨Name, 张三⟩}}], 张三]⟩

(21) ⟨x2, [{A 類形容詞}, {⟨x2, {⟨高, T⟩, ⟨difference, _____⟩}},
 ⟨★ [RH-Merge, N], {⟨高さ, x2⟩}},
 ⟨x3, {⟨高, F⟩}}], ⟨
 ⟨x3, [φ, φ, φ]⟩,
 ⟨x2, [φ, φ, 高]⟩
 >]]

RH-Merge

⟨x2, [{A 類形容詞}, {⟨x2, {⟨高, T⟩, ⟨difference, _____⟩}},
 ⟨x1, {⟨高さ, x2⟩}},
 ⟨x3, {⟨高, F⟩}}], ⟨
 ⟨x3, [φ, φ, φ]⟩,
 ⟨x2, [φ, φ, 高]⟩,
 >]]
 ⟨x1, [{N}, {⟨x1, {⟨Name, 张三⟩}}], 张三]⟩
 >]]

(23) 最終的にできた(17)の LF 意味表示

{⟨x1, {⟨Name, 张三⟩, ⟨高さ, x2⟩}}},
 ⟨x2, {⟨高, T⟩, ⟨difference, _____⟩}},
 ⟨x3, {⟨高, F⟩}}}

(23)のLF意味表示は(18)の目指す意味表示とほぼ同じである。(23)にある⟨difference, _____⟩という意味素性は、発音されていないが、“高”である（つまり、値がTである）x1と“高”でない（つまり、値がFである）x3の間の差を表していると考ええる。そして、x3がNumerationにある語彙項目でないということにより、“张三 高。”文の発話される文脈において、身長が“张三”に及ばない人物が想定されることになる。

6. “张三 很高。”の派生過程

(24) 张三_{x1} [B 類形容詞 很_{x2} 高_{x3}]。

張三 とても 高い

張三は背が高い。

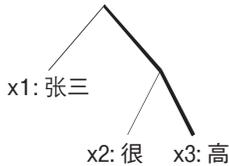
(25) (24)の最終的に目指す意味表示

{<x1, {<Name, 张三>, <身長, x3>>},

<x3, {<高, x2>>},

<x2, {<程度, 並み以上>>}}

(26) (24)の樹形図



(27) (24)の Numeration

a. <x1, [{N}, {<x1, {<Name, 张三>>}, 张三]>,

b. <x2, [{程度副詞, +Adj[RH-Merge]}], {<x2, {<程度, 並み以上>>}, 很]>,

c. <x3, [{B 類形容詞}, {<x3, {<高, ★>>},

<☆[RH-Merge, N], {<高さ, x3>>}, 高]>

(28)~(30)は(24)の Merge 過程を示している。

(28) (27b) <x2, [{程度副詞, +Adj[RH-Merge]}], {<x2, {<程度, 並み以上>>}, 很]>

(27c) <x3, [{B 類形容詞}, {<x3, {<高, ★>>},

<☆ [RH-Merge, N], {<高さ, x3>>}, 高]>

RH-Merge

<x3, [{B 類形容詞}, {<x3, {<高, x2>>},

<★[RH-Merge, N], {<高さ, x3>>}, <

<x2, [{程度副詞}, {<x2, {<程度, 並み以上>>}, 很]>,

<x3, [φ, φ, 高]>

>>>

- (29) (27a) $\langle x1, [\{N\}, \{\langle x1, \{\langle Name, 张三 \rangle\}\}, 张三] \rangle$
 (28) $\langle x3, [\{B \text{ 類形容詞}\}, \{\langle x3, \{\langle 高, x2 \rangle\}\},$
 $\langle \star[RH\text{-Merge}, N], \{\langle 高さ, x3 \rangle\}\}, \langle$
 $\langle x2, [\{\text{程度副詞}\}, \{\langle x2, \{\langle \text{程度}, \text{並み以上}\}\}\}, \text{很}] \rangle$
 $\langle x3, [\phi, \phi, 高] \rangle$
 $\rangle \rangle$
 RH-Merge
 $\langle x3, [\{B \text{ 類形容詞}\}, \{\langle x3, \{\langle 高, x2 \rangle\}\},$
 $\langle x1, \{\langle 高さ, x3 \rangle\}\}, \langle$
 $\langle x2, [\{\text{程度副詞}\}, \{\langle x2, \{\langle \text{程度}, \text{並み以上}\}\}\}, \text{很}] \rangle$
 $\langle x3, [\phi, \phi, 高] \rangle$
 $\rangle \rangle$
 $\langle x1, [\{N\}, \{\langle x1, \{\langle Name, 张三 \rangle\}\}, 张三] \rangle$
 $\rangle \rangle$

(30) 最終的にでてきた(24)の LF 意味表示

- $\langle \langle x1, \{\langle Name, 张三 \rangle, \langle 高さ, x3 \rangle\}\},$
 $\langle x2, \{\langle \text{程度}, \text{並み以上}\}\},$
 $\langle x3, \{\langle 高, x2 \rangle\}\} \rangle$

(24)の“张三 很高。”の意味は、「张三の身長は人並み以上である」となり、その基盤は(30)の LF 意味表示である。(23)の“张三 高”の LF 意味表示と見比べればわかるように、(30)には意味役割だけを持っているが、発音されない意味素性はない。そのため、(24)にある“张三”は対比のため文脈にある人物とは比較されずにその身長が語られる。

7. まとめ

本論は、統語意味論の考え方にに基づき、中国語の形容詞“高”と“很高”にある“高”を異なるエントリーとして、それぞれの Lexicon を(15a)と(15b)のように仮定した。正しく生成されたあとの形容詞述語文を見て、その中の“高”ないし程度副詞の“很”の機能を分析する方法よりは、統語意味論を用いて、Lexicon の仮定から、“张三 高。”と“张三 很高。”の意味の違いを見せる理論分析のほうが、この構文以外の中国語の形容詞に関わるさまざまな構文を論述する際に、予測が立てられ、検証可能になる。さらに、統語意味論を使うことによって、解釈不可能素性の削除過程はより透明になり、文の語順のみならず、意味解釈の基盤になる LF 意味

表示もどのように一歩ずつ生成されるのかも、明示的に示すことができる。今後は、(15)で仮定している“高”と“很高”のLexiconを用いて、(12)の表に見せている生成されない中国語の形容詞文についても、なぜそれらが生成に失敗するのかについても検討する予定である。

注

- 1) (6)に引用したように、チョムスキーのミニマリスト・プログラムにおいては、Mergeは語順を決定しないものとして仮定されており、語順はPF部門において決まると想定されているが、その詳細は明らかにされていない。
- 2) 本論文では、音形を伴わない意味役割のことを、〈意味役割, _____〉と表記し、項を〈意味役割, ★〉と表す。★というのは解釈不可能素性であり、Mergeによって取り除かれなければいけない要素である。ところが、_____で表記しているのは項ではないので、Lexiconにおいてその意味役割だけが記載され、Mergeする必要はない。
- 3) ☆[RH-Merge, N] という解釈不可能素性
削除規定：Merge相手 β がNであり、主要部として β と2回Right-headed Mergeした場合、 β の指標で置き換えられる。
継承規定：主要部からのみ継承される。
- 4) 〈★[LH-Merge, N] という解釈不可能素性
削除規定：Merge相手 β がNであり、主要部として β とLeft-headed Mergeした場合、 β の指標で置き換えられる。
継承規定：主要部からのみ継承される。

参考文献

- 今井隆・斎藤伸治編 (2018) 『21世紀の言語学』 ひつじ書房。
- 井上優 (2002) 『日本語文法のしくみ』 町田健 (編) シリーズ・日本語のしくみを探る 1 (全7巻) 研究社。
- 上山あゆみ (2015a) 『統語意味論』 名古屋大学出版会。
- 上山あゆみ (2015b) 「不定語の統語的性質とその意味表示」 *The 29th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2015*: 1-3.
- 郭楊 (2019) 「“是…的” 構文の多義性と「的」の本質」 博士論文, 九州大学。
- 郡司隆男 (2017) 「[書評] 上山あゆみ著『統語意味論』」 『英文学研究』 94巻: 151-156.
- 古川裕 (2004) 「中国語の比較構文と程度副詞」 『言語』 2004年10月号 vol.33, no.10: 48-49.